

## 南半球便り（その82）：スタバのない街

7月5日

先週は再度メルボルンに出張してきました。世界の大都市と比べて際立つのは、「スターバックス」が見当たらないこと。というのも、メルボルンっ子（英語でMELBOURNIAN。「メルブニアン」と発音しないと、通とは認められません。）曰く、「世界のコーヒーの首都」。地場のコーヒーこそ、自慢なのです。

### 1. 三巡目の深み

メルブニアン自慢の味わい深いフラット・ホワイト※を啜りながら、少し思案しました。※フラット・ホワイト（Flat White）＝聞きなれない言葉でしょうが、これは南半球、そうオーストラリアで最もポピュラーなコーヒー。エスプレッソにミルクを合わせたドリンク。きめ細かなスチームミルクを使うのが特徴で、表面にはエスプレッソのクレマが浮かびます。そのため、ミルクをたっぷり使いながらも、エスプレッソの濃厚なコクや苦みをひと口目からしっかり感じる事ができるのです。

豪州大陸回りも三周目になると、同じことの繰り返しでは駄目。型どおりの表敬訪問は卒業し、「深掘り」して違いを出していかなければ、匠の世界には入れません。着任以来営々と築き上げてきた人脈と信頼関係を土台として、一段階上の情報収集と対外発信へ。これが今回の出張のテーマでした。



メルボルンの町並み（メルボルン市ホームページより）

### 2. 要人へのアクセス

前回の出張時に先方オフィスを訪問してお会いしたビクトリア州のアンドリュース州知事を島田メルボルン総領事の公邸にお招きし、夕食を共にしながらじっくりと意見交換をすることができました。

島田総領事は外務省で私の一年後輩にあたりますが、35年以上前のアメリカ留学時代から互いによく知った仲で、条約課長の後任。私がインテリジェンス担当の局長をした時には強力な右腕として支えてくれた、昭和60年入省組切っの俊秀です。

その島田総領事夫妻の素晴らしい発案で、アンドリュース夫妻を日本一色の中にお迎えしました。まずは、メルボルン在住のプロの箏奏者ブランドン・リー(Brandon Lee)さんと、三人のアンサンブル・メンバー(谷口舞さん、シェパード千恵美さん、大行瑞穂さん)による琴の四連弾で歓待。大津公邸料理人の手による極上の和食を堪能していただいた後、「山崎」を味わいながら島田夫人による巻き藁を的としての弓道の実演を鑑賞。鋭い音を立てて弦から放たれ、公邸のフォイヤーの静寂を切り裂き、的を射る矢。歓声を上げる出席者一同。ウォーという表情のアンドリュース夫人に対し、「日本の家庭では、夫人は総理大臣、財務大臣だけでなく、防衛大臣の役目も果たすのです。」などと申し上げたら、深く頷いておられました。これぞ、大八洲の抑止力！(笑)

アンドリュース夫妻とは、次回はキャンベラの公邸でお会いすることとしています。遠くない時期に、再び日本を訪日していただくことが楽しみです。



アンドリュース・ビクトリア州知事夫妻を琴の音で歓待

### 3. 有識者との知的スパーリング

豪州滞在が長くなるにつれて、深みを増して来つつあるのが有識者とのやりとりです。

今回は、豪州最大の発行部数を誇る高級紙「オーストラリアン」の看板コラムニストとして長年活躍してきたグレッグ・シェリダン氏と突っ込んだ意見交換をしました。

互いに共通の知人を有し、面談を重ねてきた関係です。日豪関係はもちろんのこと、ウクライナ、台湾情勢、豪州内政と話題は多岐にわたり、私の方こそ学ぶことが圧倒的に多いやりとりでした。

豪州知識人特有の日本への温かみと懐の深さを感じさせる見識、そして人柄。次にお会いするのが非常に楽しみです。

#### 4. 日本企業支援

豪州の都市のどこに行こうとも応援することとしているのが、ビジネスの最前線で日夜努力を重ねておられる日本企業の方々です。今回は、二社を訪問しました。

(1) まずは、ヤクルト。

メルボルン工場では、1日に38-40万本を生産し、豪州全土だけでなく、ニュージーランドでも販売しているとのことでした。キャンベラのスーパーでも必ずヤクルトが店頭においてあるのは、「胃腸が弱い男」(ちあきなおみの珠玉の名曲「ねえ、あんた」)からの私には、有り難い限りです。

ついつい、ずっと聞きたかった二つの質問を、大野社長はじめ対応に当たられた、オーストラリアヤクルトの方々に聞いてしまいました。

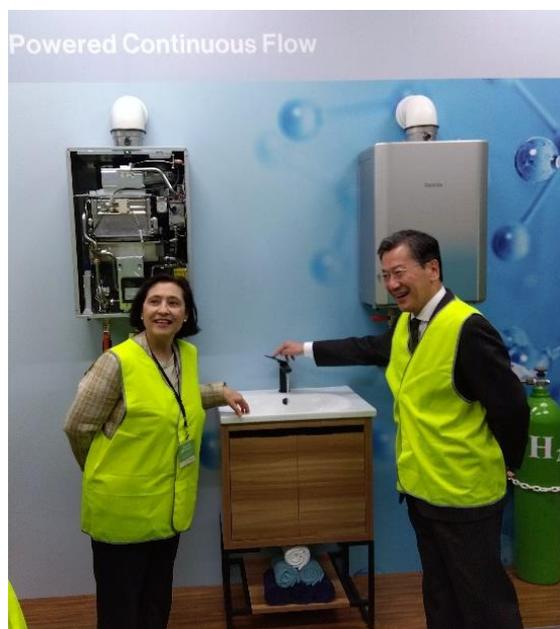
問一：『ヤクルト』という名前の由来は？

問二：一本では少ないと感じたとき、二本、三本飲んだ方が効果あるのでしょうか？

問一の答えは、ヨーグルトを指すエスペラント語（世界共通語として考案された言語）の「ヤフルト」に由来する由。問二の答えは、沢山飲むより継続して飲むことが大事だそうです。つくづく良心的な優良企業だと思いました（笑）。



ヤクルト訪問



リンナイ訪問

(2) もう一社は、リンナイ。

リンナイ・オーストラリアは1971年設立。550名の従業員を雇用し、売り上げは4億豪ドル。今回は水素100パーセント燃焼の給湯器の発表会と重なりました。

燃焼したときに二酸化炭素を一切排出しない給湯器で、脱炭素化社会の実現を大きく前進させるものです。ビクトリア州では、ラトローブ・バレーの褐炭田から水素を製造し、日本まで運ぶべく日本企業連合軍が取り組んでいることは、以前ご紹介したとおりです。そうした大きな時代の流れに沿った時宜を得たイニシアティブだと感じ入りました。

ビクトリア州政府からも、ダンプロシオ環境大臣が披露式に出席。給湯器の温水シャワーが待ち遠しくなるような寒風の中、お祝いをしました。私のスピーチは、[こちら](#)をご覧ください。

## 5. 対外発信

豪州での日本の存在感を引き上げるべく、地方出張のたびに講演かマスコミとのインタビューを入れるようにしています。今回はメルボルンを代表するシンクタンク「アジアリンク」の昼食会で講演をしてきました。

聴衆の多くがメルボルン在住の財界人。そこで、今後の日本とビクトリア州との経済関係等に焦点を当て、忌憚のない意見交換をしてきました。講演テキストは[こちら](#)です。

それにつけても、緑豊かなメルボルンの市街を一望の下に見下ろすハーバート・スミス・フリーヒルズ社の会議室で行われた会合。メルボルンっ子が大好きな豪州式フットボール（AFL）の話に始まって、日豪関係、水素、高速鉄道、観光まで幅広くカバー。別に栄華の巷を低く見たわけではありませんが、気宇壮大な話が尽きることはありませんでした。



シンクタンク「アジアリンク」での講演

メルボルン、何度でも来たくなる街です。

山上信吾